ピーがいる、トッポもいる　本物のザ・タイガース

44年　長い道たどり再び

1960年代後半、グループサウンズ（GS）・ブームの頂点にいたザ・タイガースが12月、復活する。京都で誕生して大阪で活躍、東京に出て社会現象を起こしたが、デビューからたった4年で解散した。その後、音楽活動をやめて高校教師に転身したドラムスの瞳みのる(67)が、再結成までの思いを語った。

「ピー」「ピー」。2011年、大阪での沢田研二のライブに招かれてステージに立った瞳。40年の沈黙を破っての登場に、女性ファンは当時の愛称を連呼した。タローこと森本太郎、サリーこと岸部一徳とともにゲスト参加して、「シーサイド・バウンド」「モナリザの微笑」などを演奏。リードボーカルをとると、全力疾走するようなはじけっぷりで歌いきった。

「僕はみんなと違って、休養して力を冷凍保存していたからね。変わらない応援をしていただけたのは本当にありがたかった。『なんで戻ってきた』『おまえのために解散したんじゃないか』とか冷ややかに受け止められるんじゃないかと思っていましたよ」

絶頂期、瞳は沢田に拮抗する人気を得ていた。芸能界にいたのは4年。「やりたいことが山ほどあったんです。やめても寂しさはなかった」と回顧する。そして高校に復学。

「人より遅れたから大学受験は大変でした。砂をかむような勉強。でも『こいつ音楽やってたから』と思われるのもしゃくじゃないですか。必死で詰め込みました」。慶応大学に進学、その後北京大学に留学して、慶応高校の国語・中国語教師を約30年務めた。

復帰を決めたのは08年末、メンバーと37年ぶりに居酒屋で再会した後。その直前には沢田が、森本、岸部とともにテレビに出て「ロング・グッバイ」という歌を歌っていた。

「こんなに長い別れになるなんて……」という歌い出しで、音信不通になっていた瞳に宛てた曲だった。

「居酒屋で5、6時間話していると『またやろう』というような話になりました。僕は翌年2月ぐらいから少しずつ練習を始めたけど、手足が全然動かなくてね。タイガースをやめて文学をやってきて、今度は文学と音楽が一緒になるのかなあと思いました」

気持ちは再び動き出す。瞳は「ロング・グッバイ」の返歌として「道」という曲を書き、自伝「ロング・グッバイ　ザ・タイガースでピーと呼ばれた男」(集英社)を刊行。表舞台に戻ってきた。

11年に参加したステージには、トッポこと加橋かつみが不在。「あと1人なんだけどなあ」と沢田がつぶやく姿が印象的だった。「沢田としては、かたくなに参加を拒否していた僕は可能性がなくて、かつみは声をかければ来ると思っていた。皮肉ですよね」と表情を緩める。

今年1月、ザ・タイガースのオリジナルメンバー5人がそろって、44年ぶりに復活することが発表された。「僕もやる気になって大団円になったと思ったら、大どんでん返しがあったり、いろいろありました。やっぱりオリジナルメンバーが一番しっくりくる。あのハーモニー、音域の広さはどこにも負けませんから」

復活ライブの反響は大きく、チケットはすぐに売り切れた。大阪会場は京セラドーム大阪だ。「京セラドームはやっぱり沢田が悔しいんですよ」。というのも、08年の沢田の還暦ライブ「人間60年・ジュリー祭り」が大阪会場のみ満席にならなかったから。「ぜひとも成功させなくては。沢田の屈辱はタイガースの屈辱ですからね」【出水奈美】

◇

京セラドーム公演は12月17日午後6時半から。完売したが、追加席が出る。問い合わせはページ・ワン（06・6362・8122）。

「ザ・タイガースの強みはハーモニー。中国公演もやりたいな」と語る瞳みのる＝大阪市北区で、宮武祐希撮影

沢田研二ライブに集まったザ・タイガースの（左から）岸部一徳、沢田、瞳みのる、森本太郎＝大阪市北区のグランキューブ大阪で2011年8月21日、三村政司撮影

「第65回正倉院展」が、奈良国立博物館（奈良市登大路

本展の呼び物の一つが、聖武天皇愛用の鏡「平螺鈿背

コンサートへの意気込みを語る和央ようか＝大阪

音低チャ

を発と

も多く、コ

年の塚時代

位を発

たな私

ン（06

水奈美】

巨人

術館・12月1日まで）

転換期率いた才知と詩情

竹内栖鳳「絵になる最初」（1913年、京都市美術館）

竹内栖鳳（1864～1942年）は明治、大正、昭和初期の時代を生き、京都画壇のリーダーとして日本画の近代化を推進した偉才。門下には上村松園、土田麦僊、小野竹喬ら数多くの逸材が連なるように、才能を伸ばす人間的な幅と懐の深さを持った画人でもあった。

初期から最晩年までの画業も大きく多彩。四条派の幸野楳嶺に入門した当時の「芙蓉」にうかがえる才気。古画の模写や綿密な写生は、過去の名品や先達の画風を学び、新たな時代の日本画をめざした努力を物語る。明治33年、36歳のときにパリ万博を視察し欧州各地を巡遊、深めた見聞は、帰国後に発表して大評判を得た「獅子」の迫真画面に生かされる。西洋絵画の伝統である写実を認めつつ、描く対象の本質や画家の精神性を大切にする日本絵画の写意の伝統も再認識。両方の長所を取り入れながら日本画の近代化を意図した制作は、初期文展に審査員として出品した「雨霽」の、老柳の樹上で雨上がりを待つゴイサギの群れの大作や「飼われた猿と兎」などに発揮されている。

モデルの女性が着物を脱ぐことへの恥じらいを描いた「絵になる最初」のように、一瞬の機微をとらえる才知とセンスは、大正半ば以降、栖鳳ならではの